

南極OB会 会報

No. 33

発行 南極 OB 会
会長 国分 征
編集 広報委員会

今号の主な内容

- 新年のご挨拶 ○昭和基地から新年のメッセージ ○第 59 次観測隊の壮行会開催
- 壮行会講演会「南極観測はなぜ大切か」 ○第 59 次南極観測計画の概要
- 第 24 回「南極の歴史」講話会の概要 ○「南極大陸大紀行」の出版とその内容紹介
- 寸描 毎月の運営委員会の様子
- 話題：○「南極シェフの会」発足 ○「アマチュア無線フェスタ 2017 JARD in 秋葉原」への参加
- 「山の会」発足しました！
- 南極関連情報 ○支部便り（阪奈和、北海道、北海道支部稚内分会）
- 隊次報告（19、22、27、34 次） ○会員の広場 ○広報委員会からのお知らせ

2018 年 新年のご挨拶

南極 OB 会会長 国分 征

昨年の南極 OB 会の主な活動は、南極観測 60 周年記念事業の実施であった。主要な事業は、支部を中心とした全国規模の講演会開催であり、出版なども企画された。講演会は一昨年秋の北海道支部に始まり、6 月の宮城支部による講演会をもって終了した。講演会開催に当たっては、各支部で様々な取り組みが行われたが、新しい支部を立ち上げ講演会を開催した地域もある。講演会の開催にあたり、新聞社などに後援を依頼することは、これまで行われてきたが、ある地域での開催に際し、ある協会に後援を求めたところ、OB 会とはどういう団体かと問われ、任意団体ではなく法人格を持つ団体ということで後援が得られたことがあった。単なる同窓会的な任意団体では、社会的に認知されないことがあるようだ。

記念事業の一環として計画した出版物についていえば、まだ編集のものもある。「南極観測トピックス」(仮題)として計画していた本の



南極 OB 会総会での国分会長

内容については、新たに「南極読本」増補改訂版に加えることとして編集を進めている。

「南極読本」は、4 年ほど前に刊行され版を重ねたが、出版社から新たに改訂版を出したいとの要望があり、これまでの改訂に観測トピックスを加えて、増補改訂版という形で出版されることになる。

60 周年記念事業は、まだすべて終了してはいませんが、ここで改めて会員各位の協力に感謝します。



＜昭和基地から新年のメッセージ＞

南極OB会の皆様

新年あけましておめでとうございます。南極昭和基地より新年のお祝いを申し上げます。南極に到着してから早1年が過ぎ、越冬期間も残すところ後1か月ほどとなりました。今次隊の越冬の特徴は、基地での重点観測である大型大気レーダー（PANSY）観測が本格稼働したことに加え、生物隊員の野外行動による観測が挙げられます。越冬初期には、オングル海峡の海氷が、とっつき岬にいたるまで広い範囲で流出したため、海氷が発達する極夜明けより、ラングホブデからスカルブスネスにいたる南方のルート仕事を迅速に実施する必要がありました。さらに越冬終盤の11月には、59次隊先遣隊としてドーム基地旅行隊、生物湖沼掘削チーム、設営チーム総勢18名がDROMLANによって基地に到着し一気に昭和基地の人口が50名を超える状況になり、

各チームの受け入れから送り出しに至るまで慌ただしく過ごしておりました。

昨年暮れの12月20日には59次隊の第1便を受け入れ、土井第59次観測隊長のもと順調に59次隊への引継および夏作業を進めております。

OB会員の皆様におかれましては、皆様のご健勝をお祈りいたしますとともに、今後とも引き続きご指導、ご鞭撻いただけますようお願いいたします。

皆様にとって今年も良き1年となりますよう、心よりお祈り申し上げます。

2018年元旦



第58次南極地域観測隊
越冬隊長 岡田雅樹
隊員一同



10月誕生日会にて

第59次観測隊の壮行会開催

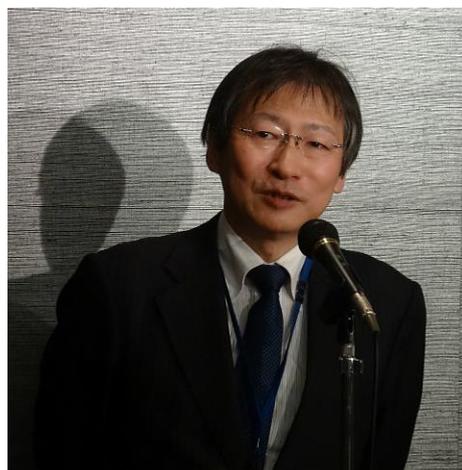
南極OB会主催の第59次南極観測隊の壮行会が、2017年11月2日（木）、午後6時半より、レストラン「アラスカ」パレスサイ

ド店で開催された。第59次隊員26名を含め、総勢65名の参加があった。国分 征会長の挨拶の後、柴田鉄治氏による記念講演があった。

柴田氏は現在、フリージャーナリスト（元朝日新聞論説委員）であり、記者時代は第7次、第47次オブザーバーとして南極昭和基地に赴き、第9次隊では南極点より、昭和基地からの極点旅行隊を迎え入れ取材した方である。記念講演は題して「南極観測はなぜ大切か」であった。柴田氏が新聞記者になったいきさつ、オブザーバーとして南極に赴いた話、そして、南極条約と地球環境の話など、南極に向かう隊員にとって興味深いお話をいただいた（本誌、別項参照）。

続いて、土井浩一郎第59次隊観測隊長兼夏隊長より、観測概要の説明があった。観測隊の構成は夏隊41名、越冬隊32名の合計73名であり、これに夏隊の同行者26名加えると、総勢99名の観測隊である。女性研究者は12名、外国人研究者は5名である。（観測については別項を参照）。

壮行会は記念講演会、観測概要が終り次第、堤雅基氏（40、52次越冬、49、50次夏）の司会進行の下で、懇親会が開催された。最初に南極OB会国分会長（7次）からは、世間ではまだ南極をやっているのかという厳しい目もあるが、南極ではできる限り外に出て活動し、また楽しんで頂きたい、と挨拶があった。続いて、吉田栄夫氏（2次）から、南極の自然と生活を楽しんで頂きたいことと、無事の帰国を祈念して、乾杯の音頭を取られた。しばらくの歓談の後、国立極地研究所新所長の中村卓司氏（52次）より祝辞をいただいた。芳野赳夫氏（3次）からは初期の頃の厳しい



国立極地研究所 中村卓司新所長の祝辞

南極を語って頂き、また、今井通子氏（会友、元南極地域観測統合推進本部委員）からは、南極は今も昔も変わらず厳しいので安全に留意することと、帰国したら世界に通ずる論文を出してほしいと、ややきついお話があった。南極OB会支部から多賀正昭氏、オーロラ会から大木淳氏の近況報告があった。歓談を挟んで、土井観測隊長による出発にむけた挨拶と夏隊員の紹介、木津暢彦副隊長兼越冬隊長による越冬隊の紹介があった。続いて、岡田雅樹第58次越冬隊長他隊員一同より第59次隊へ向けてのメッセージが披露された。国分会長より第59次観測隊に、南極OB会が60周年記念として出版した「南極大陸大紀行」の贈呈があった。全員による記念撮影を終えたあと、竹内貞男氏（10次）による中締めで会を締めくくった。（神田啓史）



壮行会参加者の皆さん

壮行会講演会 「南極観測はなぜ大切か」 (レジュメに代えて)

柴田鉄治 (7次、47次)

・いま人類が絶滅するかもしれない危機が2つある

1. 地球環境の破壊
2. 核戦争 それを救うカギは南極にある、世界中を南極にすることだ



講師の柴田鉄治氏

・地球環境の保全

南極は地球環境のバロメーター
地球がどれほど汚れたか、南極を調べれば分かる
南極の氷床は、地球の過去帳
何万年前の空気の組成もすべて分かる
「地球の病気」は、まず南極に現われる
オゾンホール (日本隊の発見)
太陽からの紫外線をカットしてくれるオゾン層に穴
フロンガスが原因と判明、フロン禁止条約へ
1991年の南極条約議定書により、南極は世界で一番環境保全の厳しい地に
温室効果ガスによる地球温暖化の進行状況も南極がカギを握る
南極の氷がすべて解けると海面が 60メートル高まる
世界中の大都市はすべて海中に没する
気候変動枠組条約(COP)の制定(1992年)
COP3 (1997年) の京都議定書をブッシュ米大統領がつぶし
COP21 (2015年) のパリ協定をトランプ米大統領がつぶそうとしている

・核戦争の防止

世界中から戦争をなくす試み
パリ不戦条約 (1928年) 国連憲章 (1945年)
ヘルシンキ宣言 (1975年) パリ憲章 (1990年)
とくに第2次大戦後の国連憲章、世界連邦の提言 (アインシュタイン、湯川秀樹ら)
それが 1961年発効の南極条約へ(南極大陸には国境がない、軍事基地がない)

南極条約で、南極大陸は人類の共有財産になった、「地球国家」誕生への道は開けた

南極条約の制定に、日本も貢献、憲法9条の精神も、「南極は地球の9条」なのだ

人類の共有財産

宇宙天体条約で宇宙空間や天体も、海洋法条約で深海の資源も
領土紛争の解決に南極条約の知恵を
尖閣諸島・竹島・北方領土は共有化を

・核兵器をどう考えるか

核兵器を「安全保障上の抑止力」と捉えるのではなく、ヒロシマ・ナガサキを原点に

核兵器を非人道的な兵器と規定し、その使用は「戦争犯罪」として禁止していくこと

核不拡散条約は「二重基準」、イスラエル、インド、パキスタン、北朝鮮も所有国に

今年 122 か国が賛成して採択された「核兵器禁止条約」こそ、これからの中心に

世界で唯一の被爆国、日本が核禁条約に反対し、加盟もしない不思議

賛成国で条約を制定し、その後、加盟国を増やした対人地雷禁止条約の成功例もある

・南極を教育に

「地球国家」の誕生は次世代に期待、教員派遣はその第一歩

第 59 次南極観測計画の概要

土井浩一郎（第 59 次南極観測隊長）

第 59 次南極観測隊長兼夏隊長土井浩一郎氏より南極観測について概要説明があった。

第 59 次隊の観測項目は第 IX 期 6 か年計画の 2 年目にあたり、重点研究「南極から迫る地球システム変動」が各観測分野で実施される。ドーム基地旅行隊の他、湖沼の堆積物採取、昭和基地の基本観測棟の建設、などの急を要するプロジェクトには先遣隊として航空機で現地に向かい、別動隊として東京海洋大学の「海鷹丸」による海洋観測を行う予定である。

重点観測では大型大気レーダーの連続観測を中心としたサブテーマ「南極大気精密観測から探る全球大気システム」、リュツォ・ホルム湾を観測の場としたサブテーマ「氷床・海洋縁辺域の総合観測から迫る大気・氷床・海洋の相互作用」、過去 80 万年を越える古いアイスコア採取を見据えたサブテーマ「地球システム変動の解明を目指す南極古環境復元」などの観測が繰り広げられる。他に、定常観測やモニタリング観測などの長期的な観測を担う基本観測、昭和基地周辺や「しらせ」船



第 59 次隊観測計画を紹介する土井浩一郎氏

上で実施する一般・萌芽研究観測を行う予定である。

アウトリーチ活動では今回で 9 回目となる南極授業を行う。また、設営関連では基本観測棟建設等、太陽光発電パネルの更新などを実施する予定である。

（神田啓史）

第 24 回「南極の歴史」講話会の概要

（2017 年 10 月 7 日（土）14:00～16:00 日本大学理工学部 1 号館 131 教室(3F)）

第 24 回「南極の歴史」講話会は演題Ⅰ「ライダー観測事始めとバイオエアロゾル観測」、講師 岩坂泰信（名古屋大学名誉教授・24 次冬）、演題Ⅱ「南極の気象・気候から沙漠の気象・気候」、講師 真木太一（九州大学名誉教授・11 次冬）の 2 テーマで開催された。紙面の都合上、演題Ⅱについて概要を紹介する。

「南極の気象・気候から沙漠の気象・気候」

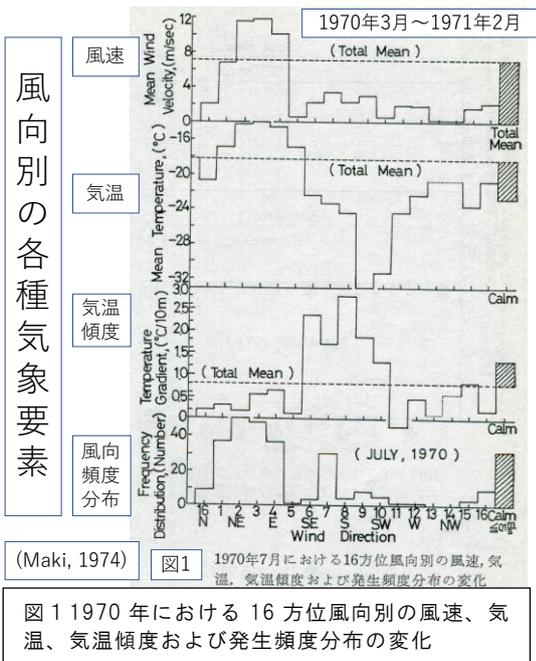
真木太一（11 冬）

第 11 次南極地域観測隊員（1969～1971 年）になってから 48 年が経つ。半世紀に近い年月が過ぎた今日（2017 年 10 月 7 日）、講演を依頼された。研究に関する論文・情報は持っているのですが、何とか責めを果たしたいと思った。論文内の図は全て手書きで、年代を感じるが、内容は話題として通用しそうである。

第 11 次隊の 1 年間の気候として、年間を通して北東風の多い風向の頻度分布、風向別

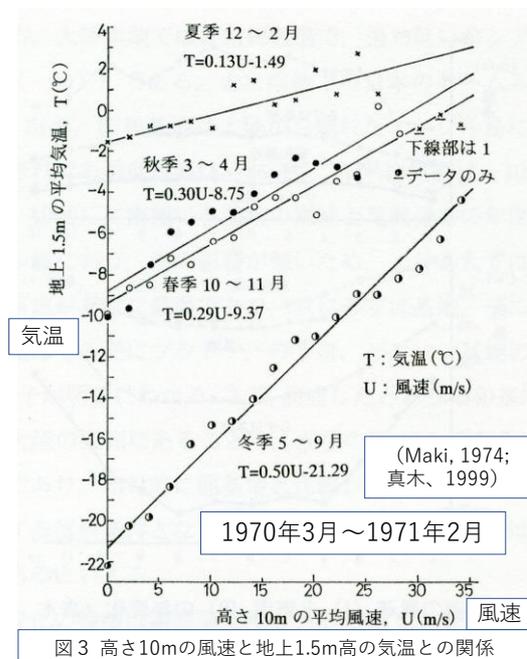
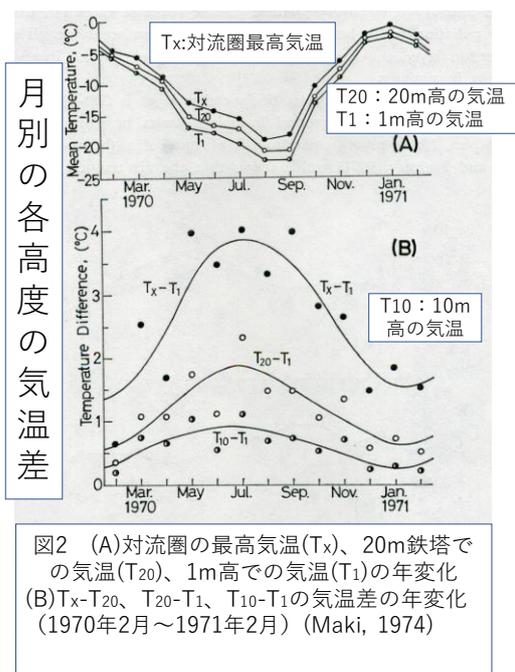


講師の真木太一氏



の風速分布、年間を通して北東風が強いが南風にも幾分強い場合がある。風向別の気温は冬季には南南西風時に低温であり北東風時に高温である。風向別の各種要素(図1)では北東～東の風速が強く、気温は南南西が低く、北東～東が高温である。気温傾度は南東～南西が大きく、風向は北北東～東風が多い。気温の発生頻度は、冬季は低温から高温まで分布範囲が広く、夏季は高温であるが頻度分布範囲は狭い。対流圏の最高気温(T_x)、20m高の鉄塔の気温(T_{20})、地上1m(T_1)の気温(図2)は順に高く、冬季には $T_x - T_1$ は 4°C 、夏季でも 1°C 高く、冬季には $T_{20} - T_1$ は 2°C 、夏季は 0.5°C 高かった。10m高の風速(図3)が増加すれば気温は上昇し、冬季には風速が 1m/s 増加すれば 0.5°C 上昇し、春秋時には 0.3°C 、夏季でも 0.1°C 上昇する。

世界で初めて超音波風速温度計を南極に持ち込み、20m高の鉄塔で乱流観測を行った。超安定気層風、カタバ(斜面下降)風、ブリザード風の周波数に対するパワースペクトルエネルギーを詳細に解析し、 $-5/3$ 則を確認すると共に、超安定時に周波数 $0.2\sim 5$ 、カタバ風時に $0.5\sim 5$ 、ブリザード時には $1\sim 5$ 程度での成立を確認した。3成分風速の標準偏差は水平縦・横方向には対数グラフで直線関係にある。20m高の風速とガストネス、ガストファクター(突風率)との関係を求めた。安定度のリチャードソン数(Ri)に対する数値(高度 z /モーンインオブコフ数 L)は対数分布で直線関係にあること、および Ri が10の超安定状態まで初めて計測した。風速と視程で



は降雪・地吹雪時の視程を観測した。ベニヤ板、箱、ドラム缶等による雪ドリフト(吹溜り)の形態を明らかにし、建築物のドリフト問題の基礎資料とした。

南極奥地から吹き出す斜面下降風(カタバ風)は国内(西条市の石鎚山山麓)での野菜栽培地域に吹く冷気流と同じ原理であり、風向・風速・気温・湿度の特性を解明し、気象資源(乾燥高温風、斜面温暖帯)の有効性を定量的に提示した。オゾン量観測を何回か行った中で、1969・1970年にオゾン総量が大きく低下していたが、報告しないため何の評価もなく、かつフロンガス削減への貢献もできず残念であった。一方、1982年の忠鉢氏らの

観測による初めてのオゾン量激減の評価は有名である。

南極では広範囲の情報を得て、次の研究は沙漠と思っていたが、1988年から中国の乾燥地・沙漠に参与して乾燥気象、黄砂・飛砂、砂漠化、防風林・網、草方格等の研究を実施した。防風施設（林垣網）と堆砂、防風施設と農作物、草方格の機能、黄砂の特性、風速とダスト濃度、黄砂と口蹄疫、森林火災と気候改変等を解明した。液体炭酸人工降雨法では、三宅・御蔵・新島、唐津市一関市、西条市一徳島県祖谷で成功例を示した。

日本百名山は2016年9月に踏破したが、日本百高山は約90である。なお、真木の百名

山（気象的に厳しい百高山の50位までと地形・気象・文化・品位で選定）を紹介し、踏破した。最後に質問の出ている臨死体験、1983年(39才)に盲腸を拗らせ（病院側の問題、入院68日間）、腹膜炎、腸閉塞で死斑が出て、死ぬ直前で帰還できた臨死体験を話した。

2017年春の叙勲で瑞宝中綬章（教育研究功労）を受章しました。2005年春に紫綬褒章を受章していましたが、引き続きで大変光栄に思います。南極関係の業績や日本学術会議・大学関係での評価が反映されたと推測されます。特に南極関係者に感謝申し上げます。

「南極大陸大紀行」の出版とその内容紹介

南極OB会では「南極観測60周年記念事業」の一環として、「南極大陸大紀行」を出版した。講話会では本書の内容とともに、60年間にわたる我が国南極観測隊の内陸探査の歴史を紹介する。

我が国南極観測隊は第1次隊によるポツンヌーテン・ヌナタークの探査を嚆矢とし、3次隊による「幻のANARE山脈探査」、4次隊による1937年山脈（やまと山脈）探査、5次隊による内陸3000米高地への進出と続き、「宗谷時代」の探検的内陸探査は、南極観測再開後、8次隊の輸送支援、9次隊による「昭和基地-南極点往復トラバース」の成功によって、「内陸探検」としての一つの時代を劃した。

10次隊以降の内陸探査は、5～7年の長期内陸観測計画として行われた。当時の内陸調査旅行は夏季の3ヶ月間、大小雪上車3～5台による2～3000kmの内陸トラバースとして行われた。1970年代の「エンダービーランド計画」、1980年代の「東ドロニングモードランド計画」はまだ内陸探査（探検）の要素が大きく、氷床の「質量収

支観測」とともに「みずほ高原」の地形、気候、基盤地形観測が主要な目的であった。これらの観測成果は「エンダービーランド～東ドロニングモードランド地域の雪氷学図（フォルジオ・シリーズ）」として国立極地研究所から刊行されている。

この間、国際雪氷観測計画の一環としての「等高線トラバース計画」、「南極氷床浅層掘削計画」なども行われ、みずほ高原からセールロンダーネ山地におよぶ広域の自然解明が進んだ。

1990年以降は「みずほ高原」の源流域（ドーム頂上域）の探査、内陸基地建設が行われ、その成果のもとに、「ドームふじ深層掘削計画」が実施され、2500m深雪氷層掘削に成功した。

2000年代にはスウェーデン隊との共同でドロニングモードランドの高地域のトラバースが行われた。

記念出版「南極大陸大紀行」には我が国南極観測60年間に行われた主要内陸トラバースの紀行、観測の概要が当事者らによって報告されている。

（渡辺興亜）

寸描 毎月の運営委員会の様子

南極OB会運営委員会は毎月1回、広報委員会、企画委員会、南極教室委員会、アーカイブ委員会との合同委員会として開催されます。

運営委員会は、「南極OB会会則」第16条でOB会運営の重要事項を審議し、会務を執行することとなっています。写真のように経費節減のため、資料のペーパーレス化を行っているため、すべての資料をスクリーンに投影する形で進められます。



「南極シェフの会」発足

篠原洋一（33次冬、50次冬）

2017年8月27日に「南極シェフの会」が発足しました。

南極観測が始まって60年、調理隊員も延べ110人・約90名の料理人が日本の南極観測基地に従事し隊員の胃袋を満足させてきました。

今こそ昔の南極観測隊の調理の苦労話、新しい基地の苦労話、改善すべき点やされた点を聞いて、調理隊員の職場環境の発展や親睦を深めていくという趣旨でこの会を発足させていただきました。

現在ご健在な方、約80名にご連絡をさせていただき、その中で連絡のついた50名弱の元南極のシェフが参加に応じてくださいました。

会長を小堺秀男先生（9次・15次）、副会長を五味貞介先生（13次・21次）にご就任いただき、会長代行を中村嘉昭シェフ（21次）にお願いし、8月27日に新宿御苑の中村シェフの「八十八」で発足式を行い、20名ほどの調理隊員にお集まりいただきました。

初めて会う顔、懐かしい顔、年配の方も若



「南極シェフの会」出席者の皆さん

い方も交じり、南極調理・調達の苦労話に花が咲きました。お店をやっている、お勤めのお休みが合わずに参加できなかった方もおいでになりましたが、これからも継続していこうという事で一致し、ほろ酔い気分で楽しかった懇親の場を後にしました。

海上保安庁の方等残念ながら連絡がつかなかった方もおります。もし参加希望の方がおいでしたら、南極シェフの会事務局 33次・50次 篠原洋一「Mirai」045-326-6475までお知らせください。

「アマチュア無線フェスタ 2017 JARD in 秋葉原」への参加

小林正幸（25次冬、46次冬）

11月26日（日）JR秋葉原駅前の秋葉原コンベンションホール5階で日本アマチュア無線振興協会（JARD）主催のイベントに協力団体のひとつとして参加しました。

当日はアマチュア無線関連の講演や展示等で500名を超える参加者があり、南極OB会ではフェイスタイムにより昭和基地とリアルタイムで結び、越冬中の吉川隊員による講演「南極観測隊の今、基地の仕事と生活」の日本側の司会を担当、また展示エリアでは写真



昭和基地からの講演会場の様子



展示コーナーの様子

パネル、南極の氷や岩石の展示や南極グッズの販売を行い、南極の自然や南極観測についての広報活動を行いました。

また、短波帯で昭和基地との直接交信も試みられましたが、電波の状態が悪く残念ながら実現しませんでした。(展示品の一部は国立極地研究所広報室に協力いただきました)

「山の会」発足しました！

2017年秋、南極倶楽部「山の会」を立ち上げました。南極倶楽部は南極OB会のクラブ活動のようなもので、毎月第3土曜日に例会および懇親会を開いています。

(南極倶楽部の詳細は、http://www.jare.org/jareOB_Hc/na_club/index.html)。

時には自然のおいしい空気を吸って身体を伸ばしましょう！ということで、このたびの「山の会」発足となりました。登山ほどハードなものではなく、のんびり山歩きを楽しむ会です。

まずは関東の日帰り山行をベースに考えていて、山での昼食や下山後のお疲れ様会も楽しみつつ、できれば温泉もと、内容はいたってフレキシブル。第1回は、昨年11月に奥多摩の御岳山とロックガーデンを歩きました。年3~4回開催の予定で、日程や場所は南極倶楽部で随時ご案内していきます。よろしければ、季節を感じに一緒に山へ行きませんか？ また、「山の会」は仮称で、現在素敵な名称を絶賛募集中です。

第1回山行 南極倶楽部「山の会」で御岳山へ

第1回「山の会」に参加しました。のんびり山歩きを楽しむという趣旨にもかかわらず、それは波乱の幕開けでした。開催は昨年11月23日(祝日)で、場所は奥多摩。929mの御岳山にケーブルカーで登り、ロックガーデンで美しい苔ワールドに浸るといって、初回にふさわしい優雅な？プランでした。ところが、



溪流沿いの苔むした岩が魅力的なロックガーデン

その日の天気予報はなんと雨！優雅どころか雨の山登りは大変だし、苔の岩場は登るより滑るイメージ…。それでも昼過ぎには雨も上がる予報だったので、早く上がることを祈りつつの決行となりました。

当日朝、普通ならハイカーで混雑する新宿発ホリデー快速奥多摩行きは、見事にガラガラ～。そんななかJR御嶽駅に集まった参加者は5人。渡辺さん、神田さん、野元堀さん、阿保さん、鈴木です。傘をさしての集合に心なしか微妙な空気が流れましたが、予定通りバスとケーブルカーを乗り継いで御岳山駅へ。



豚汁の鍋を囲んで山ランチ

10時過ぎ、ケーブルカーを降りると雨は止んでいて、眼下には幻想的な雲海！めったに見られないであろう絶景が広がっていました。来てよかった!!一気にテンションアップです。元気に武蔵御岳山神社の長い石段を上りきり、

山頂で参拝。すると、サービス精神旺盛な山の神様は、間もなく青空も届けてくれました。

ロックガーデンは、木々に囲まれた溪谷に苔むした巨岩が連なる約 1km の散策路です。雨上がりの苔は生き生きと緑色で、周辺は赤や茶色の落ち葉の絨毯。そこに木漏れ日が差し込んで、なかなか素敵な晩秋の光景でした。お楽しみのはんは、溪流沿いのテーブルで手作り豚汁とおむすびとラーメンです。すりおろした生姜入りの豚汁に、身も心もぽっかぽか。自然の中でいただく食事のおいしさと幸せをかみしめました。

長尾平からは山々と町と空の眺めが素晴らしく、辺りを舞う雪虫たちに、もうすぐ冬かあとしみじみ。気が付けばケーブルカー乗り場に戻ってきたら 3 時をまわっていました。苔や虫を観察しながら歩いたからか、かかった時間はパンフレットの倍……。シメのお疲れ様会は、御嶽駅の中華屋さんで。とても楽しい一日で、ロックガーデンはぜひまた違う季節にも訪れたいと思いました。

何が起こるかかわからない「山の会」、次回も楽しみです！

(会友 鈴木かおり)

南極関連情報

第 60 次南極地域観測隊長・副隊長決まる

2017 年 11 月 7 日（火）に開催された第 151 回南極地域観測統合推進本部総会において第 60 次南極地域観測隊長兼越冬隊長として堤雅基氏（40 次冬、49 次夏、50 次夏、52 次冬）、副隊長兼夏隊長として原田尚美氏（33 次夏）を決定した。女性の副隊長は初めて。

文部科学省主催 第 59 次南極観測隊壮行会

2017 年 11 月 7 日、明治記念館において南極地域観測統合推進本部主催の壮行会が挙行され、土井浩一郎観測隊長兼夏隊長、木津暢彦副隊長兼越冬隊長以下、夏隊、越冬隊員 73 名、南極授業担当同行教員 2 名を含む夏隊同行者 26 名（しらせ乗船者等 21 名、海鷹丸乗船者 5 名）、宮崎好司しらせ艦長以下約 180 名の乗組員および隊員および乗組員家族、並びに関係者多数が出席した。

壮行会では観測隊長、しらせ艦長から出発に当たっての決意が述べられた。また林芳正文部科学大臣、小野寺五典防衛大臣から壮行の挨拶があり、来賓の国会議員等から激励の挨拶があった。

「しらせ」は 11 月 12 日に晴海ふ頭を出港、観測隊は 27 日に成田から出国し、豪州フリマントルで合流し、南極昭和基地に向う。

昭和基地に第一便

2017 年 12 月 20 日 8 時 02 分（昭和基地時間）（日本時間 14 時 02 分）、南緯 69 度 03.5 分、東経 39 度 15 分（昭和基地西方 7.6 マイル）の定着氷に停留中の「しらせ」より、土井浩一郎第 59 次観測隊長ならびに宮崎好司艦長が乗ったヘリコプターの第一便が発艦し、同 8 時 29 分、第 58 次越冬隊（岡田雅樹越冬隊長ほか 32 名）の待つ昭和基地に到着した。

「しらせ」の昭和基地接岸

「しらせ」が、2017 年 12 月 23 日（土）現地時間 10 時 45 分（日本時間 16 時 45 分）、昭和基地の沖合約 500m の定着氷に到着し、昭和基地接岸を果たした。

今シーズンは、航路上の氷厚は比較的薄く、往路ラミング回数は 27 回であった。



昭和基地に接岸した「しらせ」

（「第一便」、「接岸」の両記事は、国立極地研究所ホームページより）

連載 支部便り

支部便り③7 (阪奈和支部)

阪奈和支部発足

—大阪、奈良、和歌山支部総会の報告—

平成 29 年 11 月 24 日 (金) 19 時から 21 時の間、大阪駅前第二ビルに在る大阪市立大学文化交流センターにて大阪、奈良、和歌山支部の総会を行いました。今回我々は、大阪、奈良、和歌山のメンバーに声を掛けて 15 名が集りました。このメンバーの中には 3 日後に 59 次隊で出発を控えたお二方もいらっしゃいました。お二方には慌ただしい時期にも関わらず出席を賜り、会を盛り上げて頂いて誠に有難う御座いました。



懇談中の杉浦隊員 (右より二人目) と東野隊員 (右より三人目)

まず幹事の計らいによりジュースやビールで喉を潤した後、59 次隊に参加される隊員による講演が始まりました。お一人目は 53 次の夏で参加経験のある東野智瑞子隊員です。東野さんは、今回は地圏で越冬されます。パワーポイントを使って小気味よいテンポのお話で楽しませてくれました。東野隊員のモットーは「行きたい処へは何処でも行く」ということらしく、これまで世界 40 か国を旅行し遂に南極越冬をしたいという気持ちが芽生えたそうです。それを叶えるための秘策のお話や、勤務していた学校の生徒に対して、自分が見たことや感じたことを自分の言葉で伝えたい、という強い気持ちがあることを語られました。また、越冬中の仕事について、観測機器のメンテナンストレーニングを 7 月頃に受けたものの、果たして本当に上手く出来るかどうか大変不安である、ということも仰っていました。それを聞き私も初越冬の時の不安が熱気球のように膨らんだ事を思い出しました。

お二人目は夏隊に初参加の杉浦裕紀隊員です。杉浦さんは船上エアロゾル観測を担当されるそうです。所属は大阪教育大学の大学院生で天体の研究をされているとのこと。子供の頃からいろんな事に挑戦する事が好きで、それが今回の参加のきっかけの一つになったそうです。「しらせ」を離れて行われる基地作業や野外オペレーションにも積極的なサポートや参加をしてみたいと仰っていました。杉浦隊員は背が高く細身ですが、元気とやる気がみなぎっていました。



講演中の杉浦隊員 (左) と東野隊員 (右)

次に出席者の自己紹介があり、夫々に思いの南極話で盛り上がりました。5 次隊から 58 次隊、宗谷乗組員や海自ヘリパイロットと、幅広い分野の OB の皆さんの南極話を語って頂きました。それは諸先輩方の偉大さ、苦勞の多さ、人の知恵の素晴らしさ、連れて行った樺太犬と隊員の絆など、興味深い話の数々でした。私などは諸先輩方にしてみれば赤子みたいなものであることを再認識しました。



懇親会の様子

次に、10 次で越冬の吉田勝氏から、これま

での阪神支部の活動の活性化をはかるという発展的見地より阪神支部を3つに分けて岡山支部、兵庫支部、そして我々大阪、奈良、和歌山支部にする旨の説明がありました。さらに我が支部の短縮名称を「阪奈和(はんなわ)支部」と呼ぶことや、新体制を支部長一名(10次 吉田勝)、幹事四名(38次 高田将志、30、58次 小西啓之、48次 小川稔、31次 加藤凡典)で運営する事が決まりました。そのあと

今後の支部の活動のやり方として、しらせ国内巡航時の寄港に合わせて集い、懇親を深めること、講演依頼やOB会の宣伝を積極的に進めてゆく事を決めて総会を無事終了しました。出席の皆様本当に有難うございました。

会場の後始末をして支部長と幹事で梅田の居酒屋にて、これからの運営を力を合わせてやりましようということで乾杯をしました。

(31w, 44w, 48w, 50w, 52w 加藤凡典)

支部便り③⑧ (北海道支部)

北海道支部による第59次隊の壮行会

北海道支部は11月16日(木)の18:15から19:45まで、北海道大学ファカルティハウス「エンレイソウ」2階の会議室において、北海道から第59次観測隊に参加する隊員の壮行会を行いました。



観測計画を紹介する

今回北海道から参加する隊員は、10月28日に出発した先遣隊の大野浩(北見工大・夏隊)、宮岡陽一(北大・越冬)、佐藤啓之(ミサワホーム・越冬)と11月26日に出発する本隊の杉山慎(北大・夏隊)、箕輪昌紘(北大・夏隊)、平野大輔(北大・夏隊)、山根志織(北大・同行者)、伊藤優人(北大・夏隊)の合計8名でした。本隊の5名は、北海道大学低温科学研究所の教官2名と博士研究員、学振の研究員、大学院生であり、極地研以外の一研究機関が、これほど大人数の南極観測チーム

を送り出すのは恐らく最初の事例ではないかと思われます。さらに、本隊の杉山さんと先遣隊の大野さんは南極OB会北海道支部の幹事なので、現役のOB会幹事が2名も同時に南極観測に参加するのも、珍しいことではないかと思ひます。



懇親会の様子

壮行会は杉山さん・箕輪さん・山根さんの3名の出席を得て、それぞれラングホブデ氷河の観測計画や抱負を語って頂きました。その後、20:00から21:40まで、北8条、西4条の「松」にて懇親会を開きました。今回は、OB会の幹事を長く勤めている杉山さんと、その研究室の若者達の壮行会でもあったため、杉山夫人も同席され、総勢10名で和気藹々のひと時を楽しむことができました。

(幹事長・14s 小島 尚三)

支部便り③⑨ (北海道支部稚内分会)

日本雪氷学会北海道支部地域講演会(稚内)

2017年9月10日(日)稚内市立図書館で、日本雪氷学会北海道支部地域講演会が開催されました。日本雪氷学会員の北見工業大学教授・亀田貴雄さん(36w、44w)の呼びかけに稚内の南極OB会が応える形で実現しました。

演題は「南極での生活と観測—みずほ基地、あすか基地、ドームふじ基地—」とし、前半の「みずほ基地とあすか基地の越冬生活」を市立稚内病院・地域連携サポートセンター長の高木知敬(21w、28w)が担当し、後半の「ド

ームふじ基地での生活と観測—過去 72 万年間の地球の気候変動と最近の地球温暖化との関わり—」を亀田教授が担当しました。ふたりの講師の南極行動は 15 年間ほどの時代差があり、両者とも昭和基地とは異なる前進基地で活動したもので、こういった講演は珍しく面白いのではないかと考えました。



講演会の様子

当日は日曜日の午後で、聴衆を集めるのは難しい時間帯かと心配しましたが、30名の聴衆が来てくれました。その中には前稚内市長で南極観測に理解のある横田耕一氏や 59 次で今年南極ドームふじ基地に行く宮岡陽一隊員（市立稚内病院で初期臨床研修医として勤務した）の姿もありました。講演で高木は南極大陸とその探検史等の基本的知識の確認からはじめ、日本隊が展開したカタバ風地帯にあるみずほ基地、セールロンダーネ山地北麓に位置するあすか基地での初の越冬生活を紹介しました。とりわけ 4 人（みずほ基地）や 8 人（あすか基地）での越冬という昭和基地とは異なる少人数での生活は、南極探検の原風景であり、両基地とも現在は南極雪原に深く埋もれているというノスタルジアも興味をそそったようです。

亀田教授は南極を志す若者を鼓舞する講演

内容で、1. 日本からドームふじへ 2. ドームふじでの越冬観測 3. ドームふじコアが記録していた気象変動と最近の地球温暖化との関係 4. ドームふじで演者が実施した観測の紹介といったロードムービー風に分かりやすく話をすすめました。ドームふじ深層コアに記録されていた過去 72 万年間の気候変動の特徴を説明したうえで、将来の気候変動は不明な点があるので温暖化対策とともに寒冷化対策が重要（特に北海道の農業）であると警鐘を鳴らしました。また演者がドームふじでの越冬観測で発見した「雪まりも」を取り上げ、それが北見市内の老舗菓子店から「南極からの贈物 雪まりも」と名づけられたお菓子になったことも紹介しました。

稚内は 1 次隊の犬ぞり訓練を行った歴史的な街で、現在も青少年科学館で南極の古い棟や雪上車を大切に保管し、夏祭りに「みなと南極まつり」と名づけるなど南極観測との関わりを持ち続けています。市役所職員の近江幸秀と市川正和を JARE に派遣した行政と南極 OB 会が連携し、「南極観測のふるさと稚内」の活動をこれからも続けていきます。



講演会関係者一同

(高木知敬)

連載「帰国後の各隊の動き」(隊次順に掲載)

第 19 次隊 出発 40 周年の集い

第 19 次隊は出発してから 40 年目となる 2017 年 11 月 24 日～25 日、箱根強羅にて 1 泊旅行を行いました。宿泊先は有形文化財に登録された古風な和風旅館、太陽山荘です。越冬隊 13 名、夏隊 3 名計 16 名が参加しました。源泉かけ流しの岩風呂でひと汗流したあ



19 次隊参加者の皆さん

と、19次隊のお祭り係長であった佐藤龍司さんの司会で宴会が始まりました。

平沢威男隊長の挨拶に続き、今年93歳になられた大瀬正美夏隊長からのビデオメッセージが紹介されました。続いて物故隊員3名の映像に向け、ご冥福を祈りました。今回参加できなかった夏隊員からの近況メッセージは神田啓史さんから紹介されました。その後、参加者一人一人が近況を語りました。殆どの人は退職を迎えています、まだ元気に働いている人や、いつまでも好奇心旺盛で、前向きに生活している人も多く、さすが、元観測隊員、と感心しました。宴会の最後は、

最近まで極地研の設営分野の責任者を務めた石沢賢二さんより、最近の南極観測隊の様子について、国際的な動向も含め紹介してもらいました。その後、元気のある人は本館3階の大部屋に集まり、差し入れの焼酎、銘酒、おつまみで二次会が盛り上がりました。金戸進さんには19次隊当時の音声記録や、8mmフィルムからおこしたビデオ映像を披露していただきました。翌日は快晴。朝風呂を楽しみ、朝食後に解散。紅葉まっさかりの箱根を三々五々、思い思いに楽しんでいただきました。

(山岸久雄、五十嵐喜良)

22次隊同窓会を開催

11月25日(土)22次隊は同窓会を開催しました。

2011年に南極から帰国以来29年ぶりの同窓会を開催し、以後毎年11月に新宿御苑前の「八十八」(やそはち:21次隊調理担当中村喜昭さんのお店)で開催しています。今年は全国各地から23名が集いました。

会は、27次隊の同窓会と重なり欠席の吉田栄夫隊長に代わり神沼克伊越冬副隊長の開会のあいさつ、乾杯で始まり、参加者の近況報告や歓談を楽しみました。



22次隊参加者の皆さん

務めた渡辺研太郎さんに最近の昭和基地や観測隊の様子をパワーポイントで紹介していただきました。また、渡辺さんからは、22次隊夏期潜水調査で採取した多毛類が新種であるとの論文が2017年1月に発表されて、当時の南極観測船“ふじ”にちなんだ学名が付いた旨のうれしい報告がありました。

小春日和の午後2時に始めた会は、新宿の街に夜のとぼりが落ちる頃午後5時に福西浩夏隊長の中締めを行い、全員の健康、来年の再会と“吉田隊長の米寿のお祝いを「八十八」で”を約束して散会となりました。

心のこもったおもてなしをいただいた、「八十八」の中村さんご夫妻とスタッフの皆さんありがとうございました。紙面をお借りしてお礼申し上げます。(幹事:酒井量基)



渡辺研太郎さんの観測隊現況報告

今回は、私たちの隊から37年の時が過ぎ、観測・設営、隊員の生活も様変わりしていることから、特別企画として、54次隊で隊長を

帰国30周年記念27次会を開催

11月25日～26日にかけて帰国30周年記念27次会を昨年から計画していた那須大丸

温泉:休暇村那須に於いて18名の参加で開催しました。今回の27次会は、大きく3つ

のグループでの集合となりました。27次会の定番である「列車で行く温泉」ツアー組、「多少距離はあってもマイカーでドライブ」、そして「どうせならもう1泊」の前泊組、それから現地（栃木県内）組です。

新幹線（なすの号）は土曜の午後なのに10号車はほぼ貸し切り状態でした。これなら大宴会ができるかと思いましたが、皆さん静かに再会の情報交換を行いました。アツという間に那須塩原に着いて、迎えの宿のマイクロで出発となりました。はじめは平坦な道路を走っていましたが、次第に勾配がきつくなり周りの木々も代わり、標高が高くなるのが分かりました。

宿には既に滝川さん・前泊組が到着しており、早速入浴しました。温泉は温度の違う2つの風呂と露天風呂がありました。既に陽が落ちて遠くの景色は分かりませんでした。眼下の街並みと山々の眺望を満喫しました。風呂上がりから恒例の0次会が208号室で行われ、1回目の近況報告がありました。この時には既に2次会用の各地の地酒・特産品が並びました。最後に青柳さんが到着して全員が揃いました。

予定通り18時からの宴会場で1次会が行われました。先ず今年2月に亡くなった佐野さんのご冥福を祈り黙祷をしました。続いて吉田隊長のご挨拶、内藤隊長の乾杯で宴会が始まりました。しばらく懇談・会食（3010運動を実行）の後、恒例（高齢）の1人一言が、これもまた恒例の秋田弁を多用する方から順次行われました。内藤隊長から何回か「質問」の手が上がり、それぞれに質問に答えていました。予定の21時少し前には宴会場での1次会をお開きにして208号室に移動しました。2次会はいつも通り31年前にタイムスリッ



参加した27次隊の皆さん

プします。特に今回はみずほ基地の話題が多かったように思います。途中で休んだ人もいましたが、2次会のお開きは予定時刻の23時をはるかに超えた、1時半だったと思います。

翌日は朝食後付近を散策しました。休暇村那須は日本百名山のひとつ茶臼岳の南麓、標高1,200mに位置していますが、すぐ近くにスキー場があり、そこはこの春登山講習会に参加した県立大田原高校山岳部の生徒ら8人が亡くなった雪崩事故現場でした。献花台は既になくなっていましたが、青柳さんから詳しい説明を受けました。3月とはいえ冬山、南極もそうですが事故だけは避けなければとの思いで山に向かって祈りました。

宿を後にする前に茶臼山・剣が峰をバックに集合写真を撮りました。那須塩原駅では計画した通り昼食宴会を青柳さんお勧めのそばの美味しいお店で開催できました。吉田隊長は米寿を迎えてますますお元気、次回も参加のお話がありました。現役組が毎年減少しますが、その分充実した27次会にできる筈です。幹事から次回は有馬温泉、念願の関西開催を提案し了承されました。その後帰路につきましたが、いつも通り思いで深い2日間になりました。

(27次 萩無里 立人)

第34次隊結成25周年記念会

1992年11月14日、第34次南極地域観測隊員を乗せた砕氷船初代「しらせ」が晴海埠頭を出港してから四半世紀が経ちました。

34次は、世界遺産登録・アメリカ大統領の訪問・広島東洋カープの連覇といった勢いがある街にあやかり、広島の地で平成29年11月4日（土）に結成25周



JARE34 25th in 広島 集合写真

年記念の会を開催しました。

幸いにも広島では、石塚徹隊員（機械）が単身赴任中、内藤望隊員（設営一般）が教鞭を取っており、現地幹事として尽力いただきました。

当日は、佐藤夏雄隊長・成瀬廉二副隊長を含め、総勢 28 名が集い盛会となりました。記念品には、六山弘一隊員（宙空）が越冬中に描いた、34 次隊全員の似顔絵入りの T シャツが作成され、当時と今を見比べながら懐かし話に花が咲きました。

二次会場はカラオケボックスで行われ、ドローンで撮影された昭和基地やドームふじ基地の美しい映像を観ながら 25 年前の彼の地を思い出し、あちらこちらから歓

声があがっておりました。

かつての酒呑童子はすっかり好々爺となりましたが、酒量は少なくとも笑いの絶えない和気藹々とした JARE34 25th in 広島の夜は更けていきました。



南極の現況を説明する本山氏（雪氷） 隊員全員が描かれた記念 T シャツ
(34 次設営一般・生涯幹事 浅香隆二)



訃報 ご遺族や会員の方からお知らせ頂きました。謹んでお悔やみ申し上げます。

(敬称略)

お名前	隊次	部門	逝去月	享年	お名前	隊次	部門	逝去月	享年
塚崎展生	11,12	ふじ通信長	H29.8	92	坪井清彦	4,5,6	宗谷	H29.8	90

南極OB会アーカイブ事業について

南極OB会では、60年以上続く南極観測の歴史に関する貴重な記録を収集し保管するアーカイブ事業を行っています。

南極OBの皆様が保管されている南極観測隊に関する諸資料（書類、記録ノート、写真、スライド、アルバム、衣類などの装備品、グッズ等）がありましたら、南極OB会で受け入れさせていただき、国立極地研究所と連携し、保管あるいは展示等の有効活用にご供したいと考えております。

廃棄すればただのゴミですが、貴重なアーカイブ資料となるものもたくさんあるはずで

す。受け入れは随時行っておりますので、南極OB会にお気軽にご相談ください。

なお、受け入れた資料につきましては、本会報にて報告させていただきます。

*** 広報委員会からののお知らせ ***

○通信費納入のお願い

今年度最後の会報を皆さまにお届けします。2017 年度通信費をまだ納入していない方は同封の振込用紙で振り込みをお願いします。

南極OB会事務局 〒101-0065 東京都千代田区西神田 2-3-2 牧ビル 301

電話 : 03-5210-2252 FAX : 03-5275-1635

メール : nankyoku-ob@mbp.nifty.com

郵便振込 : 加入者名 南極OB会 00110-1-428672

南極OB会ホームページ : <http://www.jare.org/>
